

源氏男女裝束抄

後附

9 6 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 8 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9 6 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

源氏男女装束抄後附目録

- 春冬のきぬゑく　　友乃初の衣いろく
八月より秋まで絹色　九月九日よりきぬゑ
十月より五部すあひ衣いふく
- 素手絣草つるく　　友のじめれ草
- 八月より林まで絣草　十月より五部まで絣
春冬の表着らく　　夏の初のうそだの色
- 五月又日より秋まで絣表着いふく
- 十月より祭五部までのうそだのえく

- 美多の小御ひろく 美乃初の小御ひえ
八月より秋まぐれからだ色く
- 十月より冬までその小御ひろく
- もと色乃事
- おきぬはす
- 縮のす
- 女房襷乃装束
- 吉良の内色の
- 唐衣小袖不著事

- 衣著纏抱綴人ふりて斟酌あるす
- 扇の事
- かうへぬす
- 衣袴ぬす
- 胡曹抄らぬのえい代事
- 藻塙草きぬひろくのす

源氏男女装束抄後附

○女官飭抄抜書

春冬のこぬゑく

みかくれば井のまね。くまとある身のまね
うへぬようとくと。き縫ふぬのうへやうふぬよ
か井とかさね
ちうれと。
クミナ。○紫みほへとしもん。○しも
えんぬうとあうじゆうに。○梅れさぬ
あもてふろ。ほほこうじいれもと紅梅。○裏
うすづう。ほほこうじいれもと紅梅。○裏
あうみ紅梅れとぞうとい。○あうじいがま
とゆうむだれ古れ
ゆくが今此
書にあうせん
元一院脚世

の來の衣裳
色目乃やうに
是より但今
世一ハ安房乃
官不とて
各も着うる
のとくとて
四季乃多目
かたアヒテ
着用の次才
亦古今相違

○み桃よりしきうふうじゆうれ。やかんしろ
わと○橘うすねおどとどり。○山ぶどうみはる
ふまきのさぬ。○花やまゆるふとほくらで
美ケルとかとぬ
○うし山吹表葉つわ。○紅葉ドリキムカヌ
○はくドリキムカヌ。○薺かきの表葉を紫
○えく五臘英すう山吹。○うみちろ尼六紅の
うすとがまのあれたうとと一重うじえの
あくらもとこかねづととせ童なり。○白うしや
うしとくの。○松うす林ふとてま。○かと橘
白とくの。○はくもとえざむとてむ。○蒲

菊子の衣裏花田

菊子の衣裏花田
此うち梅二月といも十一月五葉うち二
月まで桜山がさハ三月まで、薺も三月
四月うちもみかれえくへ付とらうす
四月よハ給のいねとこねのいんくと
りひひいさぬれ地ハ唐ゆうねとれ減ね
けやけめくと子細あすくくひつには
公松ヤナガラ五葉とひもうち御
へき拂うへ七毛八毛十毛よりて
五葉ハツキ
甲一又タモ
ワスツク
ワスツク
モラカウ

かうねらをほ只今の人ハスナリは、
ツモモラヒヒツモヌラシくハキニヒト
ハ小單とまのよし川ニウカモア
を子納ナリと云

更衣草夫木集
久安直首俊成卿

えくは衣ノル
ハシラ川の
うつさ源のと
あらまゆか
精好の名シ
諸國乃調庸綿
塵惡リと貢進
すといきり

夏れもくめのさねりりく

表薄紫裏青

柳ト同

ハシラ川の
せがれのと
中ハ給のとねとひもとハ衣丈の草
とて精好れす。セイコウ白ナリ
すといきり

たまひて精好
ガリととまう
トとめをあう
延喜二年八格
八月

らきひまご賀茂系八日ハシリ一のス
衣とりしりひに事を作

八月もう秋もそれ衣の袖く

15や先人もとへまのむとわざい。もと
トとし元はとと色かうね裏もと。おで
これひとへまの表もと。もとこのある
のじりもとがうね。萩のとてまねく
くまのむ裏もと。萩のとてまねく
ま。ととかへの衣とへまのねりと表もと

○うとすのむとくまの。紅のむとく
かまね。ニわねはとがまね。えひせめは
ひとくま。あらきひとくま。

むとくまねはうへすしら鐵ねうへ、
うすりのあや下へりやひとくもゆ
かまねひ下へる。平消うはねがと用の
又あやとけ色ともそりてうら月に
あうりやあくとくもとく月に。かで
こハ六月まく。女郎花。萩ハ祇園會

秋の中めうへくひうじだ小うじと皆
すし。鐵物或二重鐵物をうへまぬ
ちりくゆうなり

九月九日衣乃色

菊りくら又何と色みえぬすへにうと
このへく見ひにらはいくひゆん

十月十日五色まくお衣いろく

菊の御衣うえとく色。紅葉重八英後三
山吹の
えくすと二重紅のをさうま
一重すう一合て八りう。青の菊うすと白
裏すう

- 美子くねと美。○ういろの菊。表中紫青。
○櫻紅葉。○櫻紅葉。表中紫。○蝶。表中
紅葉。表中紫。

けやうせつろくはきのまをれの西に

お引く。おづくね

春冬の花やへづく

(單ハ衣の下) さうねりく衣
さうくによそ
単の衣も着
てさうすこ
又衣ハ被りて
引へきこつ
是すう

冬被ふ井の日と人皆こゑがぬの衣。紫のや人の衣
さうくかさねの衣。山吹のまね。夜うねの衣。あくえれ
衣。うべ六の衣。ねうねの衣。桜ゆれたの衣。そひ深
の衣。内用しげか十月より八月
すてれ衣の時をくわす。表トに祀る。○紅梅の草。白ひの

衣の時。○志穂もひとくわす。井のうどや。はぶ乃
すとくね草。桃の衣。内用十月より八月まで
○あだむと通。夜にうて着用の下トに祀る
○あだむと通。桃の衣。山吹身の衣。裏山
十月より八月。○あだむと通。裏山の衣。梅身の衣。紅
との下トよどく。

○崩木の草。表中紫。

夏乃く失れひと
ふろたすしのむと色。うぶも。やのふ。

八月より秋までひとくわすに引陪。すとがわす
すくよ。或は紅の引陪。すとがわすに引陪本すく

十月より冬の節までの單

あざれむと人織れぬ衣。○紅乃日と庵 紅紫室八
。葵扇。うつろひ扇。葵扇。○そつすら草 かえて紅紫
くさりの花の用。

表著ハ衣の上ヨ
毛うぢうり
お衣とかさゆ
内ハうぢ衣代と
小さうかり

表著の表著いろく

白丸うどん。もくもくの衣乃附着。此が五月。○崩葉、
表著。きかぬ身の衣。はめうとすの衣。つわと紅樹乃衣
まわひの衣。松かなみの衣。○桜丸うじ紅のうじ。それ
えいほ乃衣の附着。○裏山吹乃うじ。紫白ひの衣。花山吹衣
等々。○裏山吹乃うじ。英かさひの衣。内着と
○紅梅丸うじ。梅の衣。らううきの衣。あくみの衣

○えいばうめの表著 あくもひうの衣。紅楊白ひの衣代
トヨ。○横崩葉のうじ。柳の衣代 自十月より表著までの表著用
祀。○横崩葉のうじ。柳の衣代。○奥陵比表著
うぢ山吹代衣。○松かなみの衣。毛うじ。表著
の内着。○ねうねうじ。毛うじ。表著の内着。又うじ。
十月うち又表著までの内着を下に祀。○蘿芳比表著 ギヨレラ う白六の衣。松
乃表著を下に祀。○紅毒丸うじ。さうう薔薇
又え月うち秋まで。○紅毒丸うじ。さうう薔薇
内着用下よ祀。○紅毒丸うじ。衣の内着。

友乃うじめうじの衣

松重丸うじ。表著の衣代内着。○くわふ井比
うじ。井の花乃
内着用。

五月六日より秋まで。表著色

そつうれうりにあめの一まづきのひとくま
萩のとてまれはくかまの附用し ○
さがーの表著すのひとくま。藤のひとくま
さがーの表著。二わんはくとくまれ付用りなり ○ 紅乃
うときをまかーのひとくま。白地もく
うときをまかーのひとくま。白地もく
表著うじすくの付用し ○ 二わんのひとくま
表著うじすくの付用し ○ 二わんのひとくま
かまの付用し ○ 二わんのひとくまの付用し
○ 白地もくの付用し 花うちもの草上草。えいそめのひとくまの付
かまの付用し 十月うえをまて表著付用下記

十月上秋立前ゆきくの表著以迄

表黄裏青
英わらぬうれうりの表著ハ ○ 菊のひとくま
の付用し ○ 英さくの表著 衣の付用し ○ あらぬうる
ともの ○ 英さくの表著 衣の付用し ○ あらぬうる
英さくの表著 衣の付用し ○ あらぬうる
の付用し ○ 松うさねぬうとさううの菊の
の付用し ○ 薩

芳乃うりに 英の表著の ○ えいそめの表著 紅の表著の
○ 紅の表著 衣の付用し

うじく小綿ハ二重りや又かご織物と用ひ
つまよま人の表著小綿必ニ重織物あり

春冬の小綿色く

松重丸小うらりに 皆くれが井の表著の内著 ○ 赤えり
小綿 赤の表著。梅の表著。裏まくらの紅柄の表著。柳の表著 ○ えい
せめぬ小うらり 紅のうらやの表著。つじみお柄の表著。お柄裏
又十月うえ表著 ○ りゆうの表著小綿 紫白の表著。えく
とのふ下記

の時 ○ 紅臺の小うちきひつじのうすすみの衣 ○ す
もうち小御 ひくまねの衣。ねがひの衣。橘りんの衣れ
毛用毛用 ト小記。 ○ あさみ小御 花山吹の衣れ附用え又十月
○ 山吹の小うちきひつじの衣 ○ 柳の小御 かく橘
花 ○ 紅乃小御 白うじやうの衣れ附用え又五月
用え ○ 紅乃小御 う秋と毛用の下トニ化く

冬のうちめ小御の色

紅乃小うちき 茶うひの 衣の附用 ○ えひぞめ小うちき
卯のむれ衣
乃因用え

六月より株をあら小うちきいろ

二あぬのうちき ひやうの日くくま。よもう一の草
○ 藤芳小御 花くまねのひとくま。二藍
く小うちき ひとくまのひとくま。花のひとくま
○ 女廊花のうちき ひとくまのひとくま。赤
つわ小御 ひとくまの附用 ○ 松重の小御 ほすア
くら葉のうちきひとくまのひとくま
十月より五部までの小御色

芙蓉のうちき ひとくまの ○ とくま小御
あくまの衣。くま葉 ○ えひ深の小御 芙蓉の
衣乃とくまと用ひ

本文衣のとす

わらの衣

○あた

小うらわせ事

夏ももの

内用く

衣のうへ

ま

草と行は非也
草のとす衣ぢ
一。又袴と
きぢ近代も

身に小袖とる
あゆてその
次草り衣

衣表著小袖
と者かさめゆ也

寝に引きと
いつば板じよ
すすみか

夏ハ紅或へこむ引とけなりとひ行とそ草

紙りも又ひとかき紙より倍本かさねゆも

けり大抵此かとて大方へはくまうと事

とすの事

とすの事

作とを但衣のとすとうど小袖と時
もとてぬきこりとひととろひんすう

肝要と後

すとぬれ事

紅のあやとすて、かきのれい稚人チキとあたす
かきのえを小からむじりつらふはくねいも
常にひとくそりとくめうぢり、こゑうちとハ紫の
又むくよサ衣とまくわむぢり、今乃世みゆくものと深

ろはまのびきのひり

衣とすに、
衣の上に草
りう暗さく
さすあり

誇の事

張誇と紅の平
紺と板り玉も
どふ濃張誇も
亦板りなり。革
のハ絛のてあ
とひ毛鐵生
乃紅の誇が
裁縫も着用も
望りなり。

ひのうもつ誇ハ税の内濃張誇ハ襍のとひ生れ
紅の誇ハ友多同、多も御衣ハ領或ハ六
領或立以下此よ小もアトミテリ。友は
むくへかテねのうみ誇とある近代ハ小袖
を着用を促引げく。内ハ御衣とちと
物具ハ多む。夏引倍本うも見裳唐
衣小腰引こう。睛の内悉うなり
女房ハ襍の内ハむくへ表著紅のうらき又度

衣ホモ一て裳とさぬ例なり。但因くハ義服
单張誇と着せば只衣乃とふ裳かと云ふ
系す例也。う。裳うもさぬ。
下仕もあらせ

あびくぐりの

あびくぐり裳のキナリ男ハ誇の上にま
女ちから裳の上からかう褶とあり
主入ハがく衣ゑうち内小袖とあらり唐衣み
小うりこと着け事あり
義按 あびくぐりハうもとのと小かくわら尻

吉のとハ裳本
の具ケリ。大
也と毛いあ
の具ケリ。大
上萬女房也
とゆとよハ
ちづらあつる
の威のたれ
すのとす
えうきいあ

やうねもほ
けう女房ハ城地
のがうさと
ゆうてうえ
タケスヨハ
ミツルのえ
ほのうき
モトシムカ
モトシムカ
モトシムカ
モトシムカ
モトシムカ
モトシムカ
モトシムカ
モトシムカ
モトシムカ

とたれかう元持のナ一推乃行アリに付ヤセ也
唐衣着く次よ裳れけ事とくひよ、かタシ
かう掛革ハラムカナと同一地とて繡アリ
裳ハ後ウロヘリナリ著ハ左右スヒモクノリは
リナリとつ裳みをえく、ソリ圖別スビアリ
表著ハ城地入り入内ノの附女房五部の章女考
織ものと用りナリ 内裏中下萬城地あやホ
と思ギナリ

扇ハサウエ事

義按

女ハサウエのあふきハ行こめ扇とひく地ハ檜の板
凡三十九枚とぞらて胡粉ハフ粉ハフめにて金銀泥薄
朱黛綠青ハタハシハシと彩色とモ絵ハ強富る
事か、大形扇ハサウエのねと畫り、い手ハサウエ
まよそとぞらうらんまうとあすれ、鷹ハシよのとひ
じすひあひて組さげて、ちきにね、鴎ハシの巻
枝と付、アガハメよ蝶小鳥ハシとすり、生書
みかざれハ今ふき代補ハサウエ
かさ子ハサウエの事

うりたのよふあらり童安ひまうねり

義按かきめ丈尺すば五弓の時童安後坐
まつうの板ともどかくうけりうけり委類聚雜要

抄よゑもうち圖別よゑり

う色の榜れ事

うのほくあこめハ新うれもうさうのくわハ
すしーううと雅すけ装束抄よゑり

源氏葵

ノ

童女い晴のとれハ赤榜とまうり榜のうふ
着榜紋ハ窠よげれとまうかく尋常ハ表の
くうはと不署

ふのかづらくは事うりとつとも本書に

くくくくやうせよもと暑をう又び書ハ
後成恩寺殿下的御作なり

○胡曹抄抜書

衣色之事

梅面白裏蘿芳自十一月至二月○柳面白
山吹面薄朽葉裏○重山吹面黄○躑躅面蘿
青○藤面薄紫裏青藤重同之三月四月○松重面青裏紫
梓櫻面蘿芳○櫻萌黃面萌木○蒲萄染面蘿
梓櫻東赤化

今揚色と云の
濃とうもとと
半りうとよ

花田○紅梅十一月ヨリ二月ニテ○苔紅梅面紅梅裏蘿芳○裏倍
紅梅裏○今様色濃紅○卯花同柳○菖蒲面
裏紅梅五月○花橘面朽葉裏○瞿麥面紅梅裏○
青朽葉面青丹黒アリ○萩面蘿芳○萩經青經
緯蘿芳○女郎花經青緯黃○白菊面白蘿芳又号蘿
裏青九月○黃菊表黃裏青○移菊面中紫○黃紅葉
面黃裏蘿芳九十月○櫻紅葉面蘿芳黑○蝦手紅葉面
芳裏青○青紅葉面青裏○槿花田○黃朽葉○
赤朽葉○苔色面香黑三アリ裏二藍○檜皮面蘿芳黑
黄

虫襖或人云此
虫いつきれり
よしやみり
かのきはる
搔練火色ハ各
別少て表裏紅
打火色アリ又
裏張アリカリ
薄色と必紫の
うすことアリ
アリとモ
えいはりアリ

海松色面崩木○虫襖面青黒アリ裏○濃蘿
芳○薄蘿芳○裏濃蘿芳○蘿芳香面蘿芳
黒木賊○青木賊○黃木賊○赤色染之アラガ
○篠青同柳○冰面白マウガイ○雪下上白裏紅
○枯色面白裏面黄裏淺青○枯野○祕色色
○比金襖面青黃○紫苑面薄色○鳥子重面
莢芳○搔練張又云火色○萌木濃一○赤
香○香文濃○瑠璃色○二藍赤花青花
色○淺黃○青鈍○濃打濃紫打○花田濃薄
有之

○薄青○薄青文濃○若蝦手ワカカエテ面薄青テ裏紅○龍月リュウガツ
面蘋芳ワカカエ○白襖○水色○苗色タケ薄崩ハラハラ○若苗色タケ木
東青ヒマツキ○赤檻ヨレバ○魚陵山鳩ヨレバ○水蘭地ララン黃橡イエノカハ○虹ヒメジ
氏出源ヒタチ○赤檻ヨレバ○魚陵山鳩ヨレバ○水蘭地ララン黃橡イエノカハ○虹ヒメジ
色○青色サヌ○青丹アラニ濃青丹アラニ黃イエ○青丹アラニ濃青丹アラニ黃イエ
葉重八ハナミツバ○葉重八ハナミツバ○紅濃薄レニンボク一重蘋芳ワカカエ一重ハナミツバ○紅紅梅ヨリハ○
落栗色ハナミツバ○當色ハナミツバ○當色ハナミツバ服令義解ハナミツバ謂位色是也見干衣
アリ○濃色ハナミツバ織物經緯ハナミツバ○薄色ハナミツバ經緯ハナミツバ白ハナミツバ○半色ハナミツバ經緯ハナミツバ共薄ハナミツバ
紫ハナミツバ○花田ハナミツバ淺黃ハナミツバ○薄青ハナミツバ經白ハナミツバ○香ハナミツバ就老若ハナミツバ
葡萄染ハナミツバ經赤緯ハナミツバ○赤色ハナミツバ經紫緯ハナミツバ○萱草色ハナミツバ柏子色ハナミツバ大略同ハナミツバ
也ハナミツバ同卷ハナミツバ

正月

○藻鹽草拔書

以上

聽色ハナミツバとハ紅ハナミツバよも
紫ハナミツバとトスナ
トソ濃色ハナミツバと
禁色ハナミツバ。支字
深の濃色ハナミツバも禁
色ハナミツバ。薄ハナミツバ
ゆきハナミツバ。

蘋芳ダウサウ○鉛色ハナミツバ御說ウツシ花三ハナミツバ深也ハナミツバ鍊ハナミツバ又
入テ染ハナミツバト云云ハナミツバ○鉛色ハナミツバ云花田深也又或云青花ニ
スミヲ入ハナミツバ也又青ニビ色アリ青鉛ハナミツバ○聽色ハナミツバ紅ノウス
花田濃色ハナミツバ也尼ハナミツバ用ル色ナリ玉著ハナミツバ○聽色ハナミツバ紅ノウス
云也尼君ハナミツバトモ裏ハナミツバノ衣ニハハナミツバ支子御衣ハナミツバ支子色
紅用ル也源氏玉葛ハナミツバ卷見ハナミツバ○支子御衣ハナミツバ支子色
尼著色ハナミツバ也ハナミツバ同卷ハナミツバ

家をけり又まゝあけ衣とハ年始の物也。○柳葉表
放よあみうきて見るかうさうの衣れ色あり。○柳葉表
うそ青。○花柳の衣れと白。○もも柳衣表
なり。○若草の衣れと白。○もも柳衣表
ち。○若草の衣れと白。○もも柳衣表
二月。○若草の衣れと白。○もも柳衣表
二月。○若草の衣れと白。○もも柳衣表

けくの衣れと白裏。○江梅にきて紅。○もも
桜。○うそと花桜。○からと桜
たれて紫。○まきはまがま。○さく。○葛。○ね
むう。○さく。○さく。○さく。○さく。○さく。
○さく。○さく。○さく。○さく。○さく。○さく。
○董乃衣。○董乃衣。○董乃衣。○董乃衣。○董
乃衣。○董乃衣。○董乃衣。○董乃衣。○董乃衣。

一月。○白衣。○白衣。○白衣。○白衣。○白衣。
岩絶。○白衣。○白衣。○白衣。○白衣。○白衣。
三月。○紫の衣。○紫の衣。○紫の衣。○紫の衣。
えくの衣。○白衣。○白衣。○白衣。○白衣。○白衣。

青黄。○花山吹。○花山吹。○花山吹。○花山吹。
かすみ。○花山吹。○花山吹。○花山吹。○花山吹。
けふ。○花山吹。○花山吹。○花山吹。○花山吹。
用。○花山吹。○花山吹。○花山吹。○花山吹。

名前

四月

あさばさな。○衣の衣。○印花の衣。○うの衣。○表

あさかさな。○衣の衣。○印花の衣。○うの衣。○表

菅家元葉集歌
曰蟬之音聞者
哀那夏衣薄哉
人之成徳思者

うらむりそゑノイ或ら
表白く裏毛を行ひ ○ セナ乃羽衣あら衣とよと
トガリ出しこのゆ深底もとよすと只うらく
すれぬる衣と以て次ノのがうれ衣として一々毫毫
あがえぞれきぬ 面薄崩木
紅毒 うら居 ○ カラソ人のみ うらて白糸紅梅 ○ 葵
乃衣 うらて唐青 ○ まめりぞれ 衣白裏毛一は
○ あやうびたりとくれある
○ あやうびうらひうらひ

五月

あやうぬみ林 うりてかね ○ 花あやめ表白
○ 根三あらぶ うらて白くうる紅み日暮くもすりよつす
おへえの衣 面裏うれ ○ おでこころ衣 うりて紅
○ 花あらべ うらて白裏紫
夜にふうの ○ うら色うら衣 面うとわくだらうふき
うら ○ 振りひきうるぬ うらてうらじうらじうらぬ
あら ○ あらううらうるぬ うらてうら代う毛とりひひぞ
かくゆううらうるぬ

六月

空すりてうらい ○ あうちの衣 裏薄紫
白さにうらうり ○ あうちの衣 裏薄紫 ○ うら
おへえの衣 面裏うれ ○ おでこころ衣 うりて紅
○ 花あらべ うらて白裏紫
夜にふうの ○ うら色うら衣 面うとわくだらうふき
うら ○ 振りひきうるぬ うらてうらじうらじうらぬ
あら ○ あらううらうるぬ うらてうら代う毛とりひひぞ
かくゆううらうるぬ

夏もだの衣 うりてあと ○ うら色うら衣 うら入を
さねじえうらうり ○ お柄うかまひ うらうり
かくゆううらうるぬ
とれひもとくひのう
かくゆううらうるぬ

七月

とぎぬ衣 裹こと蘿木 ○ からうの衣 ありて裏 ○ 萩
かすみ 面はる裏 あはれ衣 ○ 花籠たむら ありて白く裏 うへ
かすみ 八九月まで月へ ○ 花籠たむら 花田なりこれハ

八月

まき草 ありてあそび ○ 苗をうぬ 裹田 ○ き
もやうねりてを田 ○ 志のぶ ありてうそり ひよりそ
○ まくらんの衣 ありてこれ ○ からわ あらうりふく
ぞうから
ゑど

九月

菊 ありて四つ葉 ○ くきが井菊 ありてぬ ○ 黄菊
たりて英 ○ うりのひよし 面紫裏印 ○ 或ハ英なりば
夷志 ○ うりのひよし 十月維摩會まで用ひ也
○ そばも菊 ありてくれあらう英 ○ 志と小面紫裏
○ そばも菊 九月かづらあのせう ○ 志と小モモ
○ そばも 面英裏うすりに式ち ○ 黄紅繚 裹田
英かり又山橘名号に ○ 黄紅繚 裹青 ○
黄紅繚 面英裏 ○ 志と小モモ ○ そばも菊
かすみ花田なり ○ 河さざねまで八月うち障す ○ はな地也
居留ソアノ前 ○ 河さざねまで八月うち障す ○ はな地也

十月

あくつかみ その衣文化あらうりてうそりふく菊の
じごろえあらひのひ病氣なみふと用ひか

○かと延の意、西夷アヘンの事アシテをもつて成らく。
○御此薬アメノリキ、
えうエウが御一任アケシヨウの菊ヒマツツクサをわざてまうまく成カタマクる。
なり是十月シベニから月メシの紅葉アメノハヤハヤ又紅墨アメノハスバりくもけ月
までハ暮カフる。
五月ナニツの月メシ記を

十一月

おほり、かすカシれまでまはよりらうアメノハラタク。○もくゆ
おもてゆ是をいそうちアシテみえひり或ハ引てあろく。
うこゑウコエが升アシテりてにまされともいまよさば。
二三ニムをへは月アメノハルと月初アメノハタチ又節アメノハシヨもほんだと
用アシテなり。仍今月ハ紅梅の月アメノハラメなり。

十二月

梅アメノハラメと白角アシタコ裏アヒタタカヒ青梅アメノハシメの夜ナニツとつよ。○雪アシテ

入りてゆアヒタタカヒ初寒と同アメノハラメ又紅梅アメノハルとシソ又代りてあらぐう
み揚アシテたるは亥アヘン月メシと川アシテもとまきアシテしれとも十二月シベニ
のし用アシテり。○ほど見アシテれどもそひう裏アヒタタカヒあしまも是故
よきう。○ほど見アシテれどもそひう裏アヒタタカヒあしまも是故
用アシテりやもあ
以上に季

雜

松アシテうねアシテちりてま裏アヒタタカヒ紫シモシのうめいとけあたアヒタタカヒのゆ
さんアシテ又老アシテても紫シモシのうめいとけあたアヒタタカヒのゆ
くさアシテ面アシテそぞ英アシテのまアシテさり六位シロを用アシテり。○ひる
かりてはうはちアシテ六シロそめ。○六シロのひ本アシテ崩ハラフ○充アシテ文
りうかり老人アシテ老アシテなり。○六シロのひ本アシテ崩ハラフ○充アシテ文
うを咲アシテ。○水アシテにらアシテ葉アシテ。○海アシテ松アシテ色アシテ。黑アシテ色アシテ。
くらアシテの葉アシテ紫シモシの紅アメノハヤハヤ。○城アシテさうアシテおアシテえびアシテくさ

江日是方樂事抄後附
うれしやまかひ ○ あそくいろいろとく集 ○ ひとつ目
もか圓え えんあく
もか圓え えんあく

以上

女官餠抄。胡曹抄。藻鹽草之拔萃者。渡邊
康映後附也。今又少補。且所加。鼈頭耳。

壺安著

源氏男女裝束抄後附終

